

# 美術館を楽しむ「アート体験コーナー」 ～教育普及活動の活性化に向けて～

池 上 秀 敏

## 1 はじめに

美術館は、質の高い美術品を広々とした空間で、自分なりの時間をかけてじっくり、ゆっくり鑑賞できる至福の空間である。

当館が独自にもつ教育資源である豊富な美術作品と情報、広々とした様々な施設や自然と調和した環境、学芸員や職員やその協力者等を生かした教育普及活動の活性化について、実践を通して考える。

## 2 教育普及活動の現状

当館では、教育普及活動の主な活動として、従来からワークショップ、映画鑑賞会、美術鑑賞講座・館長による美術史連続講座、作品解説会、県下各地での年2回の巡回ミュージアム等を行い、教育プログラムやデータベースやハイビジョンギャラリーを備え、美術館に親しんでもらったり、情報提供を行ったりしてきた。これまで企画展や常設展に合わせて講演会、コンサート、トークショー、実演会・実演制作等の多様な取組も行ってきた。日常的には広報活動や学校関係をはじめとした来館団体への対応・解説会も行っている。

また、本年度は、これまで日曜日午後2時から行っていた作品解説会を常設展では毎週土曜日、企画展では毎週日曜日に行った。さらに、昨年度来行っている体験型と参加型の二本立てのワークショップにも力を入れた。

これらの取り組みにより、それぞれの催しにたくさんの方々を得るとともに好評を博し、美術館利用も積極的に行われてきた。

## 3 美術館を楽しむ

美術館で美術作品を鑑賞する。一般的な考え方だが、様子を見ていると必ずしもそうではない。

ほとんど決まった時間に訪れレファレンスのソファに身

を沈め時間を過ごしたり読書したりする人。図書コーナーでお目当ての作家の画集を眺める人。ワークショップや講演会に必ず顔を出す人。野外彫刻のある庭を散策する人…。当館では、野外彫刻は隣の公園と隔てるものがなく自由に鑑賞できる贅沢なつくりであり、散歩コースの一つにする人もいる。

このほかにも講堂や講座室、ギャラリー等も貸し出しているため、音楽や演劇、個展やグループ展の発表会等の利用もひっきりなしで、実に多様かつ人それぞれの活用方法がある。

これらの人々や様子を見ていて、入館者数には反映されないが、市民・県民に愛される美術館として微笑ましい姿が実現されているといえる。

しかし、さらに何ができるか。学校での美術教育や社会教育での美術講座と異なる美術館独自の効果的な教育普及活動が他にもあるのではないか。生涯教育を視野に入れた社会教育の一つである美術館のもつ特性を生かした活動が必要である。

## 4 アート体験コーナーの試み

美術館により一層親しんでもらいたい。美術館に来て美術作品を見て鑑賞するだけではなく、来館者が何らかの働きかけができる場が持てないか、固苦しく考えず、時に肩の力を抜いて参加したり活動したりできるものを考えた。

「もっと気楽に美術館を訪れ、大いに美術館を楽しんでもらいたい」という思いがあり、2007年4月～2007年9月の間行われた第Ⅲ期常設展「楽しいアート・アートを楽しむ」の中で「アートに親しむ、これがアートと思うものに あなたも挑戦」と銘打って「アート体験コーナー」を設けた。

この展覧会では1960年代の長岡現代美術館賞展を中心とした現代アートの作品を展示した。長岡現代美術館

賞展は当時としては地方の一私立美術館が開催した現代美術展として画期的な公募を行う展覧会で、毎年行われ5回まで続いた。

展覧会の構成は、1950年代後半から始まったアメリカの「ポップアート」の流れに始まり、それに続く1960年代前後の「読売アンデパンダン」「ネオ・ダイズム」「具体美術協会」「長岡現代美術館賞展」「ライト・アート」等の作品を展示し、日本の現代美術の流れを紹介するというものであった。

この展覧会では、作品のテーマや技法に関わるクイズを用意したり、作品を見るポイントや見る位置等を床に表示したりして、鑑賞を楽しめる工夫が施された。難解と思われるがちな現代アートに頭を柔らかくして、子どもたちの無垢な目で親しめるようにした。

現代アートは、既成のイメージを流用したり、テレビやコマーシャルなどのメディアから題材を得たり、新しい素材や技法を取り入れたりし、それまでの美術の既成概念を打破するような表現さえ見られ、美術の概念を大きく変革した。

このような表現の幅を広げた現代アートを追体験する場として、手づくりの「アートパズル」「碁石でアート」「形と色の組み合わせ」「ペーパー3D」の4つの体験コーナーを会場近くの回廊等に設置した。

#### (1) 体験Ⅰ パズルでアート

「手軽にアート体験、まず頭の体操から」と銘打って、昨年度寄贈となった岡本太郎の《顔》の油絵作品の図柄を手製パズルにした。赤い色面を背景にして顔が踊るような色彩で表現され、中南米のマスクを思わせる作品である。来館者にパズルで鮮烈な岡本作品に注目してもらうことをねらい「岡本太郎の《顔》に挑戦」とサブタイトルをつけた。ちょうど美術館ニュースの表紙を飾った図版があり、白ボール紙をA6版くらいの大きさに切ったものを3枚貼り合わせ、一番上のところにこの図版を貼りこれをランダムに切りパズルとした。合計3セットと元の図版1点を用意し、常設展入口付近に長机を用意しその上に並べ、椅子も備え、体験コーナーとした。

趣旨をボードで説明するとともに、もう1枚ボードをつく



アートパズルの取組

り、レベル分けした取組例を紹介し、動機付けを図った。

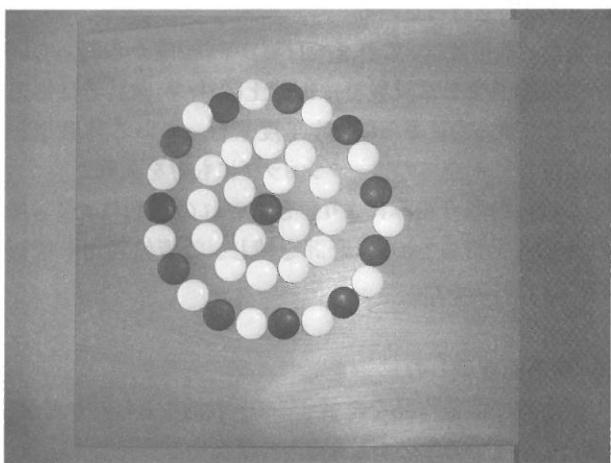
レベル1 完成図を1回見て、後は見ないで完成させる

レベル2 完成図を途中、3回まで見て完成させる

レベル3 完成図を見ながら完成させる

#### (2) 体験Ⅱ 碁石でアート

現代アートは、概念的な表現や既成のものやイメージを転化したり発展させたりして新たなイメージを創出している。視覚的には、形と色の組み合わせや見立てが重要な要素になっている。この表現への手がかりを追体験できるよう碁石を並べて形をつくるコーナーを設けた。小さな頃に石を並べる遊びに熱中したような原初的な表



碁石でアートの作品例

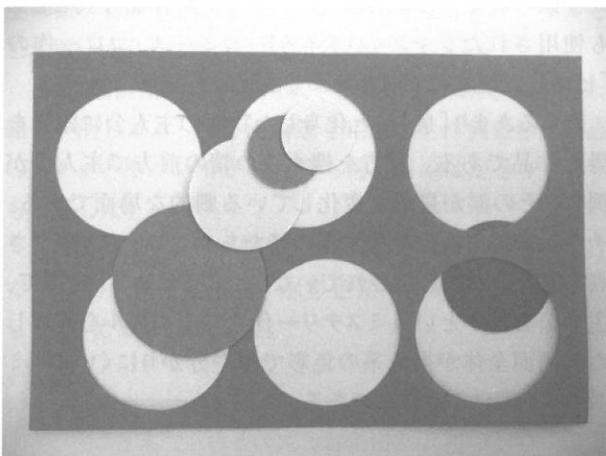
現への体験をしてもらいたいというねらいである。

補足説明として、「白黒の美、アートは並べ方しだい、条件をそろえたものを並べるだけ、選んだ色台紙の上に「碁石」を並べて形をつくりだす」とボードで表示した。

複雑な要素を排し、単純なユニットとなるよう碁石を素材に選んだ。同じ形のチップ材料でもよいが、意外性のある碁石の転用がポイントである。

### (3) 体験Ⅲ アートは「形」と「色」の組み合わせ

(2)の発展として、色味を加えた。「単純な形と色の配置、選んだ形と色を色台紙に配置して、楽しもう」とボードで呼びかけた。色画用紙を大きさが3種類の円(直径2cm、3cm、4cm)に切ったものを、いろいろな色の台紙(A6版)に配置して、配置・バランスを楽しむものである。円は、(4)との組み合わせにしてもよいこととし、さらにいろいろなバリエーションが楽しめる。



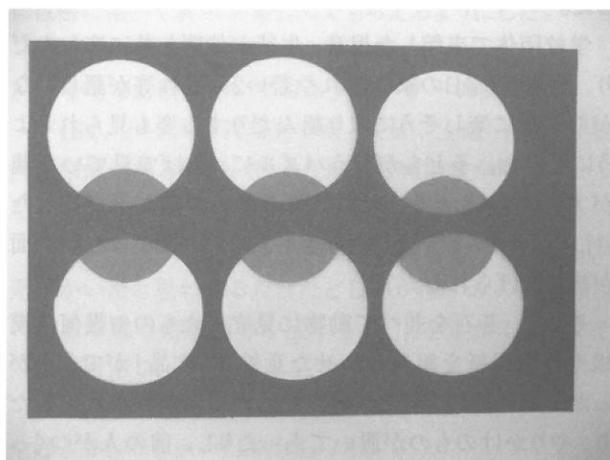
形と色の組み合わせの作品例

### (4) 体験Ⅳ ペーパー3D

展示された現代アートの作品の中に、レモ・ビアンコの「3D」という作品がある。

地が赤い色面の上に白く塗られた板をいろいろな形に切り抜いたものが2枚重ねられた作品で、陰影や切り抜かれた穴が微妙に重なり新たな形とイメージが広がる。

この作品を模して、色つきの台紙に円でくり抜かれた白い紙や色画用紙を重ねて、見え隠れする新たな形と色を楽しむ体験コーナーを用意した。「白い紙と台紙の色紙の組み合わせは、どんな形やイメージを生むか」という問い合わせをボードに示し取組を促した。



ペーパー3Dの作品例

### (5) 展示体験

(3)(4)で取り組んだ作品について、「あなたの作品を展示すると、つくったものをかんたんに額装して、飾ってみると、アートな心が広がる」と、ボードに説明をのせ、簡易展示のすすめを行った。アクリル製品のメニュースタンドやキャップションケースを簡易の額として、展示を促した。

### (6) アートボランティア

こうした一連の活動をした参加者に、同コーナーで体験活動の手助けをするアートボランティアへの参加を呼びかけた。

「あなたもアートボランティア、ちょっとお手伝い、体験したこと伝え、アートを通して、人とコミュニケーションしよう、感じたこと思ったことを伝え つながる心」と説明書きし、「体験コーナーでお手伝いいただける方、お申し出ください。」と付け加えた。

## 5 体験コーナーの実際

これらの体験コーナーを設置して2、3日後、体験コーナーのある常設展入口付近や回廊の机の前に足を止め、説明ボードに目をやり関心を示す姿が見られた。そして、早速椅子に腰かけパズルに取り組む子どもの姿も多くなった。

学校団体で来館した児童・生徒が仲間と共に楽しんだり、土曜・日曜日の家族連れや若い2人連れ等が語らいながら気楽に楽しそうに取り組んだりする姿も見られるようになつた。子どもが行うパズルに、そばで見ていた親がアドバイスしたり、家族の間の思ひぬ話が飛び出したりリラックスして取り組む姿も見られ、微笑ましい場面が繰り広げられた。

そして、碁石を並べて動物に見立てたものや幾何学模様や色画用紙を組み合わせた意外な「作品」ができあがつた。巡回時に見ると、仕上がつたものが置かれていたり、やりかけのものが置いてあつたりし、前の人気がつくつたものを見て楽しむ姿も見られた。

ある保護者は、「子どもと楽しい時間をもつことができた。」と感想を述べ、別の来館者は「おもしろい取組ですね。いつまで、やっているんですか。」と言い、おおむね好意的な意見が寄せられた。また、学校団体で利用したある学校職員は、「期間が終わってしまうが、また来館したら、ぜひ体験コーナーでやったことをやらせてもらいたい」と言い、再び生徒を連れて来館し取り組む様子が見られ、高い関心が寄せられた。

## 6 体験コーナー第2弾

「楽しいアート・アートを楽しむ」に続く第Ⅳ期常設展「自然主義の系譜」(会期11／16～2／3)でも体験コーナーを引き続き実施した。

この展覧会では、19世紀半ばからのコローやバルビゾン派などに見られた風景画に確立した自然主義を中心に、その影響を受けた日本の洋画や日本画、ロダンに見られる写実主義とその周辺の作家の作品を展示した。

ここでは前回に続き、出品作にかかる《パズル》2点と《「小さな自然」をかいてみよう》、《かざってみよう》の3つの体験コーナーを用意した。

### (1) 体験Ⅰ パズルでミステリー

今回は、ちょうど数点の寄託作品の展示があり、その中に美術館では日本初公開となるビンセント・ファン・ゴッホの初期作品「長い棒を持つ農婦」と、セザンヌの「水浴図」が含まれ不思議な因縁が感じられた。この「水浴図」を用い、体験Ⅱとも関連し、ミステリータッチでパズルコーナーを構成した。

「アートをミステリータッチで体験、《名画》バラバラ事件をかいけつせよ」と、ボードに掲示し、挑戦意欲を引き出すために、以下の補足を付け加えた。

ミッション1 だれの絵だかわからない。完成させよ。

ミッション2 何人えがかかれているか、かいけつせよ。

ミッション3 会場のどこにある絵か、発見せよ。

### (2) 体験Ⅱ パズルでミステリー ……事件は続く、今度はゆくえ不明事件 《名画》ゆくえ不明事件をかいけつせよ

今回の展覧会出品作であり、チラシの作品写真としても使用されたジャン・バティスト・カミーユ・コロー作の「ビブリ」をもとにパズルをつくった。

恋するあまり「泉」へと化した物語の主人公に題材を得た作品である。行方を捜す森の精の前方で主人公が倒れ、その涙が泉へと変化している劇的な場面である。チラシでは主人公を捜す森の精たちがクローズアップされ、主人公が映し出されていない。ここにヒントを得て、主人公を捜すというミステリー仕立てでパズルを構成した。画面全体が褐色系の色彩でやや分かりにくいのもミステリー調によい作品である。

ここで付け加えた指令は、次のとおりである。

ミッション1 どんな絵だかわからない。完成させよ。

ミッション2 主人公がいない、どこにいるのか。

ミッション3 手がかりは会場にある。発見せよ。

### (3) 体験Ⅲ 自然主義？ 「小さな自然」をかいてみよう

自然主義は、自然や自然にあるものを客観的にあるいは主観的に見て表現しようとする表現態度であり、一般的に自然のものをありのままに見て、写実的に表現したいという気持ちに通じる。自然は身のまわりにあふれ、

すべてのものに命が宿るという自然観もある。

時は、ちょうど秋。少し一人静かに自然の摂理に触れてみるのもまた一興である。そこで身近な自然に目を向け、描きながら考える場を設定した。説明ボードには以下のように記した。

『まずは、秋の紅葉した「葉」を一枚だけかいてみよう。かたちをよく見てかこう。えんぴつでかいてみよう。あとで、いろえんぴつ、えのぐでいろをつけてみよう。(うすい色からつける。)

つぎに、「葉」ともう一つのものを、組み合わせてかいてみよう。

さらに、思いのままに、いろいろなものを、組み合わせてかいてみよう。』

紅葉したイチョウやモミジ、サクラ等の葉を採取し、ジップのついたビニル袋に入れてモチーフにしたもの用意した。

このほかにも、松かさやドングリなどの木の実や落花生の殻、貝殻や形のおもしろい植物の枝等をサンプルとして置いた。

また、描画用のはがき用紙やしおり用の細長い画用紙、鉛筆・消しゴム・水彩色鉛筆を用意し、作例として数点のスケッチやペンでかいた持ち帰り用のはがきやしおりも用意した。

さらに、形が取りにくいという人のために、輪郭線だけでかいた下絵を用意し、水彩色鉛筆で思い思いに着色してもらえるようにもした。



《「小さな自然」をかいてみよう》コーナー

#### (4) 体験Ⅳ あなたの「小さな自然」を展示してみよう

…あなたのかいた「小さな自然」をボード等にかざってみよう。

体験Ⅲの脇に、着脱可能な弱い粘着性のある90×60cmの大コルクボードをイーゼルにのせて用意し、参加者に自由に貼って展示を楽しんでもらえるようにした。

#### 7 「小さな自然をかいてみよう」コーナーの実際

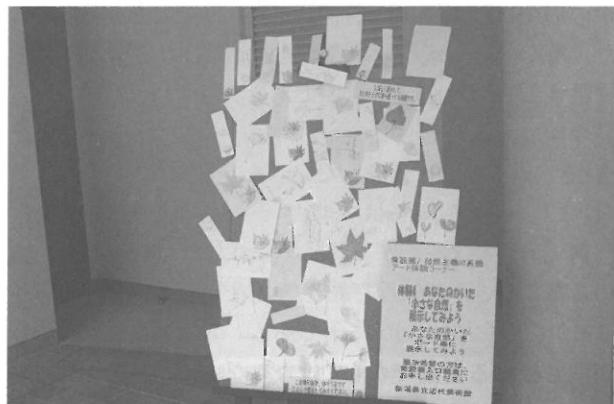
平日は、2~3人の利用者であったが、土曜・日曜・学校団体来館がある時は、5~6人以上と利用者が増えていった。

展示コーナーには、かなり細密に描写したものから幼児がかいたと思われるたどたどしいが温かみのある味わいのある線の鉛筆画等が展示され、日を重ねるごとにその数が増えていった。

また、「小さな自然」にこだわらず大らかにキャラクターや好きなものをかいた絵もあった。

さらに、モミジとサクラの葉を最初から水彩色鉛筆で書き込み「秋深き」となりは「何をする人ぞ」という言葉を添えたり、二枚貝をていねいに書き込み「二枚あって、はじめて」という味わいのあることばが添えたりする絵手紙風のものや描いた日付やサインまでつけられたもの等々、多様な表現が楽しく展示された。

中には、年賀状仕立てに仕上げたものや「合格、○○大学に受かりますように」と裏書きされたものまであり、予想を超えた表現・利用方法まであり、今後の展開の大きな参考になった。



《「小さな自然」をかざろう》コーナー

コルクボードに貼られた作品は合計約60点以上になり、関心の高さがうかがえた。ひとりの時間を惜しみ集中してかき込んだ作品、親子の楽しい会話まで聞こえてきそうな作品もあった。

コーナーに用意したはがきとしおりの用紙は、週に20枚ずつ合計400枚くらい、持ち帰り用のペン画でかいたはがきとしおりも150枚くらいずつとなった。

毎日の開館・閉館業務として、体験コーナーを見て回り、用紙類を補充したり、鉛筆や水彩鉛筆の芯を削ったり、展示コーナーに貼られた作品を整理し、他の作品が貼れるようにスペースをつくったり、物品の整理を行ったりした。利用者に快適に、楽しんで取り組んでもらえるよう環境を整えた。

## 8 美術館を楽しむ場の提供

「美術館でこういう取組を大いにやってもらいたい。楽しくていい。来た子どもたちが喜んで取り組める。」と、おおむね好意的な意見をもらったり、パズルについては、「子どもにはパズルのピースが小さい」「パズルの絵が同じ色調でむずかしかった」等の改善への提案ももらったりした。

好意的な意見は無論、批判や提案であっても、いろいろな反応があり、体験コーナーの利用者の声がもらえることは何よりの楽しみと励みになる。また、熱心な「作品」にふれることができるもの大きな楽しみである。

体験コーナーの実施を通して、来館者は美術作品を見るだけではなく、美術館での体験や味わった思いを何らかの形にしたいという気持ちをもっていることを強く感じた。多くの人々が美術館で積極的に楽しめる場と時間を提供する事が何よりも重要である。

今回の実践を通して、今後「アート体験コーナー」を行うとき、以下の点に留意したい。

### (1) ねらいと対象をはっきりさせた取組

何でもいいようだが、やはり何のために行うのか、始める前にしっかりと焦点を絞りたい。今回「楽しむ」ということが、まず大きなポイントである。基本的に、だれでもが取り組める企画でなくてはならないが、いくつかのコーナーを設けたりコースに分けたりすることで関心に応じた取組に応えることができる。パズルのように子ども

でも取り組めるものから、取組の度合いを利用者が加減できるスケッチコーナーのようなもの等、複線型の場を用意することが大切である。

### (2) メンテナンスとサポート

体験コーナーは、設置すればよいのではない。利用者の立場に立って、快適に利用できるよう常に点検・管理が必要である。物品の整理や補充、修理等、異常に対してもすぐ対応することが大切である。今回用意したパズルについても、印刷物を利用してつくったため、台紙の白ボール紙との間ののりが取れてはがれることがあり、何回か補修を行った。

また、体験コーナー設置中、様子を見て、取組中の利用者に声をかけたり、やり方の分からぬ場合に補足説明したり、取組を促したりすることがポイントになる。利用者の感想や反応が伺え、改善や今後の取組の参考にできる利点がある。

### (3) 手づくりと創意工夫、そして楽しむ

事業や企画は費用がかかる。しかし、十分な予算はない。だからやらないではない。それでもやる。だからこそやることが必要である。何かの働きかけがなくては、何も変わらない。

このようなときに、大切なのは手づくりでやってみて、改善しながら、充実させていけばよいのではないか。手づくりであれば、費用は抑えられる。その分、何か工夫をしたい。

取り組めるものをいくつか用意する。コース別にする。利用者の創意工夫も生かせるようにする等々、そして、何よりも立案者が楽しむことのできることを行なうことが、もっとも重要である。時に利用者の立場に立って「楽しむ」姿勢こそが新たな取組につながる。

## 9 終わりに

美術館の一角がにぎわった。今回は、あくまで「コーナー」としての取組であったが、あそこにもここにも、そして常に美術館へ行くと「楽しめる」場があるという「アート体験コーナー」を継続実施し、充実させるとともに、常設コーナーとする方向を探っていく。今後も新たな教育普及活動の各種事業の計画的・継続的な展開を図っていきたい。

(新潟県立近代美術館 学芸課長代理)